天使大学における英語教育のあり方を求めて
―EGP教育からESP教育へ―

Toward Designing English Language Education at Tenshi College: From EGP to ESP

吉　田　　翠
Midori YOSHIDA

At the newly established Tenshi College, founded in 2000, how English language classes should be designed and conducted to meet the students' needs is an important issue. College education, including English language instruction, must provide students with solid academic preparation before they enter the professional world. This paper first introduces ESP, a newly developing trend in Japanese college English language education, in hopes that the faculty members of the School of Nursing and Nutrition will have a shared knowledge of what ESP is and that the English teachers will obtain support and assistance from these faculty members. The paper also discusses how EGP and ESP education should be balanced in light of the educational goals and the instructional settings of Tenshi College. Secondly, this paper shows the results of two questionnaires administered to Tenshi students and faculty, respectively. The results of these surveys may contain significant information for improving EGP and ESP courses in the near future. A successful ESP education can also develop learner autonomy, the basis for lifelong learning throughout the careers of Tenshi graduates. Finally, practical applications for the future reform will be proposed.

Key words：一般英語　EGP
専門英語　ESP
学習者の自立　learner autonomy
ニーズ　needs
シラバス　syllabus

天使大学 教養教育科 教授

はじめに

2000年4月、天使大学は単一学部をもつ四年制大学として一歩を踏み出した。この看護栄養学部は看護学科、栄養学科、そして両学科の共通科目を担当する教養教育科から成る。これら2学科の学生のために、共通科目の一つである外国語（英語）教育を大学の教育目標に照らして今後どのように構築していくかが、英語担当教員に課せられた仕事である。

天使大学の教育目標には、「国際的視野を養う」「各々の専門的能力を基盤として、将来、各々の専門職の発展に貢献できる応用力と創造性を養う」と謳われている。これをさらに具体化し、看護学科の教育目標には「問題意識を持ち、批判的、科学的に思考し、主体的に学習する能力を養う」「人間愛に基づき、国際社会に貢献する能力を養う」、栄養学科の教育目標には「社会の変化に柔軟に対応し、課題を探求する能力を養う」「人間愛をもって、専門職者として国際社会に貢献する能力を養う」[1]と記されている。つまり、これらの教育目標は生涯研究する姿勢をもった職業人、国際社会に貢献できる職業人の育成を目指すものである。英語教育がこの教育目標を具現化する一助となるためには、在学中に職業に必要な英語力養成と卒後も継続する学習姿勢を育成することにあるだろう。

そこで大学英語教育学会（JACET）のなかで、最近活発に活動しているJACET-ESP（専門英語）研究部会の研究および教育実践を紹介することによって、専門科目の基礎科目ともなる専門英語教育について2学科の教員と語学教員が共通理解をもち、将来学生が就くであろう職業に生かせる基礎力を与え得る英語教育を育てていきたいと考える。

本論は以下5つの部分から成る。(1) EGP教育とESP教育　(2) 初年度（平成12年度）入学者の英語学習への意識　(3) 2学科教員からみたESPへのニーズについて紹介し、(4) 学習者の自立についても触れる。最後に、(5) 天使大学の今後の英語教育へ提言したい。

1. EGP教育とESP教育

1.1. EGPとESPの定義

大学における英語教育の目的について述べるとき、はじめにEGPとESPの用語の意味を理解する必要がある。これら2つの概念を把握するために代表的な定義を紹介する。

EGPの定義　『ESPの理論と実践　これで日本の英語教育が変わる』（2000：15ページ）

> English for General Purposes/EGP
> （一般的な目的のための英語）
> ある特定の目的を定めずに学習する英語のこと。特定の目的のための英語（English for Specific Purposes/ESP）と対照をなす。日本の中学校や高等学校および、多くの大学の教養課程における英語教育では、特定的で具体的な目的（例：看護教育における英語など）は特に定められてはいない。学習者はいかなる分野における英語の使用にも対応できる英語力を身につけるという目的で、英語の授業を受けている。これは一般的目的の英語の典型的な例である。
> 『英語教育用語辞典』（1999：105ページ）

一般的な目的のための英語という表現では、「一般的な目的」の意味がほとんど曖昧になっているため、定義としてあまり役に立たないという指摘がある（『外国語教育学大辞典』1999：144ページ）。Strevensによると、学校全体のカリキュラムの中で学科として行われる言語教育を、「教育上の目的のための英語」と説明しているが（同：145ページ）、このとらえかたのほうが解りやすい。敢えていうならば、前者の例としてC. K. Ogden（1968）が唱えたBasic English[2]、後者の例として日本の高校で習ういわゆる「学校英語」[3]を挙げることができよう。以後EGPの区別が必要なときは，どちらを指すか言及する。

ESPの定義 『ESPの理論と実践　これで日本の英語教育が変わる』(2000：18ページ)

> ESP (English for Specific Purposes) とは「それぞれの学問領域や職域には固有のニーズが存在し、そのニーズによって同質性が認知され、異質性も生じてくる。そして、同質性が認知された各専門領域内では『ディスコース・コミュニティー』集団が形成され、その目的を達成しようとする。その場合、各集団の内外において明確かつ具体的目標を持って英語が使用される。その際の言語研究および言語教育」をいう。

ESPの定義はいくつかあるが、深山他 (2000：18ページ) によると上記のESPは次のように説明されており、きわめて明快である。

このESPにおいては、英語は次の2種類の状況で使用される。第1の場合は、ディスコース・コミュニティー[4] 内部から英語が発せられるが、実際に対象(受信者) となるのは当該ディスコース・コミュニティー外の者という場合である。例としてはホテルや航空会社などの接客や、専門分野の異なるディスコース・コミュニティーの者との情報交換などがある。第2の例としては、発信者も受信者もディスコース・コミュニティー内部の者で、英語が「コミュニケーション活動の一環として機能」するだけでなく、学会発表などを通して「新たな知識を構築する」際に役立てられるような場合が挙げられる。

この定義に見られる2つの場合を、天使大学の看護栄養学部の英語に当てはめてみると、看護婦(士) が日本語を話さない患者を問診するときの英語と研究または最新の理論や技術を入手するための英語といえる。管理栄養士にとっても、日本語を話さない人々に栄養指導を行う英語と研究に必要な英語といえる。従って2つの場合を想定して英語を学ぶ必要があるということになるだろう。以後、ESPはこの定義に従うものとする。

1.2. EGPからESPへの配列

次にEGPとESPの関係はどのように表されるのだろうか。ここでGeneralからSpecificに連続する過程を示した図を紹介したい (Dudley-Evans and St. John 1998：9ページ)。本学の場合、厳密に図1の通りにはならないが、1年次はGENERALよりの1と2の中間、2年次は2と3にまたがり、取り上げる教材は専門の入門的な内容となる。3、4年次にはSPECIFICよりの4となろうか。

1.3. EGPとESPのシラバスにおける割合

教育現場におけるEGPとESPの関係について、会津大学のThomas Orr (1998：19ページ) は次のように述べている。

"Pedagogically, a solid understanding of basic EGP should precede higher-level instruction in ESP if ESP programs are to yield satisfactory results." つまりESP教育を真に実りあるものにしようとするなら、EGPの基礎を確実に習得することが先行しなければならない。しかしこれは理論的には正しいが、現実には難し

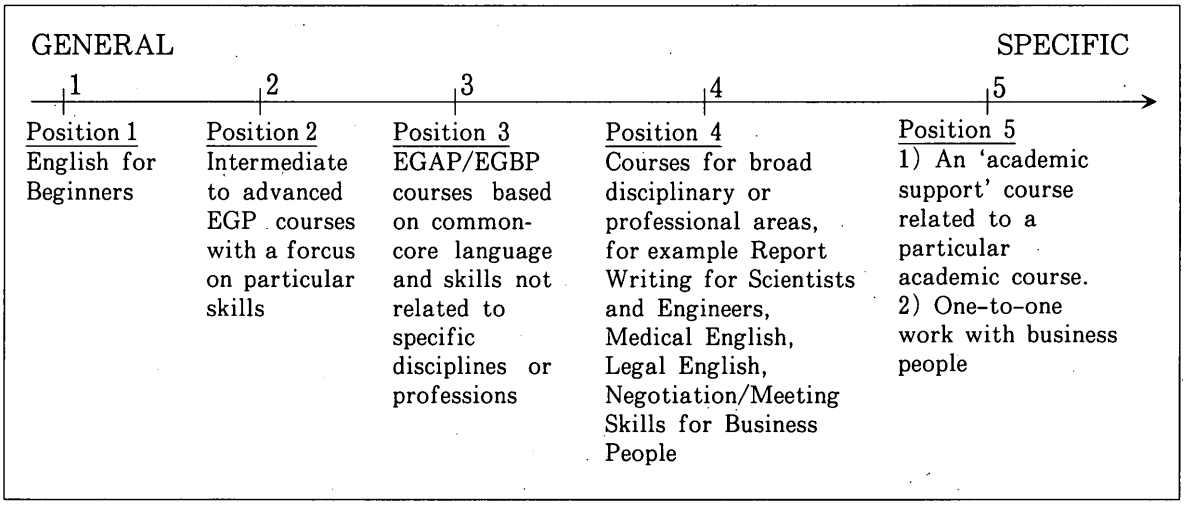
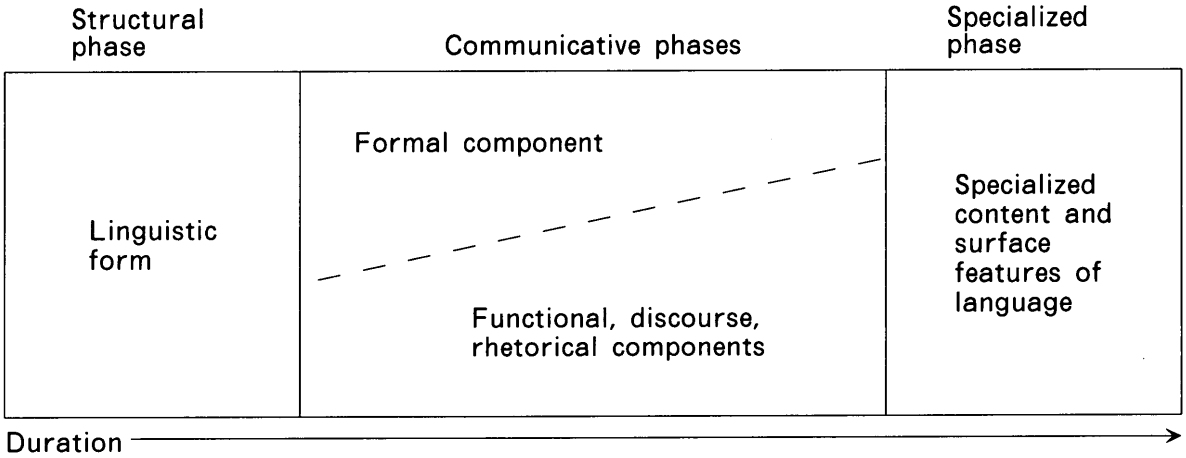


図1　Continuum of ELT course types
(Dudley-Evans and St. John, 1998：9ページ)

い。なぜならばEGP（Basic English）はかなり大量に接する努力をしなければ核となるもの（相沢 1995：222ページ）が学習者の中に育たないからである[5)]。時間的制約のある大学教育の場において、特に実験・実習の多い専門分野においては、EGPを確実に習得させるほど時間がとれないのが実情ではないだろうか。

従って双方を厳密に区分けせずに、図2のように、それぞれの教育現場のニーズによって多少重複させながら進めるような計画が必要である。これは言語習得過程からみても自然の理である（Yalden 1987：95-96ページ）。それぞれの教育機関の実情を踏まえて、どのようなカリキュラムとシラバスが望ましいのか十分に検討しなければならない。

EGPクラスとESPクラスをシラバスに配置するとき、どのように分類できるのだろうか。ふたたび深山他から引用すると、表1となる。これはEGPとESPクラスの比較を極めて解りやすくまとめており、シラバス作成上参考になる。



Fully developed proportional model. (Based on Yalden 1983 : 124.)

図2　（Yalden 1987：96ページ）

表1　EGPクラスとESPクラスの比較（深山他2000：87ページ）

ESP/EGP	レベル	教　師	アプローチ	教　材
EGPクラス	レベル1	EGP教師	EGPアプローチ（素材の意味理解に重点を置いた指導）	専門分野のトピックを扱ったリーディング教材
準ESPクラス	レベル2	EGP教師	EGPアプローチ（専門用語・語法など、言語の一側面を分析）	専門分野のトピックを扱ったリーディング教材や、分野に関する英文素材
	レベル3	EGP教師	ESPアプローチに対する訓練は受けていなくても、教材の選択によってESPクラスとなっている	ESPクラス用教材（ESPエキスパートが作成した教材）
ESPクラス	レベル4	ESP教師であるが、他専門分野のESPクラスを担当する場合（例：工学専門のESP教師が法学英語を教える）	ESPアプローチ（コース・デザインから教材作成まで、教師がすべて行える）	ESPクラス用教材
	レベル5	専門分野のエキスパートと絶えず連携がとれる立場のESPエキスパート	ESPアプローチ	ESPクラス用教材

1.4. ESP 教育の特徴および利点

深山他（2000：19ページ）によれば、ESP 教育を実践する上での基本的特徴として以下の 2 項目をあげている。

1）学習者のニーズの分析に基づいていること
2）ジャンル（学問的背景や職業などの同質性）が認められること

この学習者のニーズ分析結果に基づき、教材、教授法、教室運営などを決めることと、固有のジャンルの内容を取り上げることが最も際立つ特徴である。EGP に比べて学習者が取り組みやすい要素をもっているため、焦点が絞りやすい。

この点に関して深山他（2000）や JECET 内教育実態調査研究会（1993）が ESP クラスの特徴として挙げているなかから、以下の点を紹介する。

1）大学特有の教育ができる
2）学習目標、到達目標が明確である
3）専門性がモティベーションを高める
4）専門知識を生かした言語へのアプローチができる
5）教材として本物の素材を使用することができる

1）の大学特有の教育ができるとは、論文を読む、論文の要旨を書く、共同作業によるプレゼンテーションをする、プレゼンテーション準備のためのリサーチやグループディスカッションをする、プレゼンテーションについての質疑応答をするなど、4 技能を総合的に生かした活動が可能である。2）は限られた条件の中で達成感が得られる。これは実験・実習の多い専攻分野の学生にとって、限られた時間のなかで目的を達成できる ESP は利点といえる。3）の学生の専門性を生かした学習内容がモティベーションを高めることは多くの教員から報告がある[6]。4）と 5）については，専門知識を生かした読み方は読みを深めるといえる。専門用語に盛り込まれた情報や意味を学習者の専門に関する知識を働かせて読みとっていく。専門知識を通して言葉の意味を理解することが可能になるだろう。その結果、言葉はより内在化する。また，本物の素材をつかうことは机上の学習が現実の世界と結びつく機会となる。

1.5.「大綱化」以降 ESP 教育の広がり

平成 3 年（1991）の「大学設置基準の大綱化」以降、各大学・短期大学は組織改革、学科・学部統廃合、カリキュラム改訂などを実施し、学習者中心の教育重視の方向へ動き始めた。特に大きな改革を求められたのは外国語教育であった[7]。「教養教育」という名のもとに、教員の好む内容の訳読中心授業が主流を占め，「コミュニケーションのできる英語力」をという学生のニーズに答えることのない授業が行われていたということである。

現在パーソナル・コンピュータの普及、インターネットの活用など、教育工学の導入により、英語の学習は教室内作業にとどまらず、「国境のない教室」[8] で学ぶことが可能な時代となった。「使える英語力」が身につくよう語学教育の改革と実践に取り組んでいる大学が増えてきているが、この流れのなかで、専門分野のニーズに応える ESP もあらためて注目され始めている。全国的な統計はまだ取られていないが、JACET-ESP 研究部会が中心となって実施したアンケート調査結果によれば、ESP 教育への関心は確かに増しつつある[9]。

工学系、医療系などでは、「大綱化」以前からニーズに応えるべく専門英語の教育を実践してきたが、「大綱化」以降、社会科学系でも学生のニーズに答えたカリキュラムを設定、実践している大学が見られるようになった。現在、会津大学、大阪工業大学、久留米工業大学、長岡技術科学大学、金沢工業大学、武庫川女子大学、北海道薬科大学、立教大学、立命館大学、運輸省航空大学校、群馬県立医療短期大学、埼玉医科大学などで ESP 教育が実践されている。学会などで発表していない大学、学部でも大なり小なり ESP を取り入れているものと推測される。

1.6. 本学における EGP・ESP 教育について

平成15年度の四年制大学設置完成年度まで、表 2 に示されたカリキュラムのもと英語教育が行われているが、1.3. で示した表 1 の ESP クラス分類から見るとレベル 1 ～ 3 に属するといえる。

異なる入学方法により、入学者の英語の学力は揃っていないと考える。英語 I と II については、1 年次は EGP 教育（学校英語の復習）により英語の基礎力をつけるために、英文の読み方とサマリーライティング（概要を書くこと）、文法の復習を主とする。2 年次にはそれぞれの専門に関連した入門的内容のテキストを使うことにより、専門英語と専門基礎語彙に触れる。これは準 ESP 教育といえるだろう。オーラル・イングリッシュ I・II とも今のところ ESP とは関係のない内容

である。オーラル・イングリッシュⅠはEGPでよいが、オーラル・イングリッシュⅡは将来的には対人コミュニケーションのためのESPを導入することが可能である。看護学科4年次の英文文献講読は英語教員の担当である。栄養学科3年次の文献講読は和文文献講読のなかに英文文献も取り入れることになっており、専門系教員が担当する。

教育目標の一つである、卒後も学び続ける自立した学習者を育てるために、英語の科目設定、授業計画、および時間数など今後改善の余地は大いにあると思われる。

2. 平成12年度入学者の英語学習への意識

2.1. アンケート調査と集計結果

平成12年度入学者に対して、4月の英語Ⅰの初講時に「英語学習に関するアンケート調査」を実施した。以下4つの観点から、それぞれ学生の経験した英語学習および英語学習に対する意識とニーズについて問うた（資料1参照）。

1. リーディングの学習について
2. 文法事項の習熟度について（自己申告）
3. 英語を学ぶ重要性について
4. 大学における英語の授業に望むことについて

本論では上記の観点3と4、つまり調査項目のうち(6)9項目と(7)5項目の結果について報告す

表2　天使大学　英語カリキュラム

学年	1	2	3	4
講数 必・選 / 学科	通年 30 必修	通年 30 選択	通年 30 選択	後期 15 選択
看護学科	英語Ⅰ オーラル・イングリッシュⅠ	英語Ⅱ オーラル・イングリッシュⅡ	フランス語	英文文献講読
栄養学科	英語Ⅰ オーラル・イングリッシュⅠ	英語Ⅱ オーラル・イングリッシュⅡ	フランス語 （文献講読）	

注1：栄養学科3年次の文献講読（後期15講）は、専門系教員が担当する。
注2：英語Ⅱ、オーラル・イングリッシュⅡ、フランス語から2科目以上選択する。

表3　英語学習に関するアンケート調査(6)と(7)の集計結果

(6) 英語を学ぶことに関して、次のそれぞれについてどのくらい大切であると考えますか。	学年平均	SD	看護平均	SD	栄養平均	SD
B-22　海外へ行ったとき(食事や買い物など)日常的なことができる	4.64	0.77	4.82	0.58	4.47	0.88
B-23　英語の映画やテレビ番組や歌などが理解できる	3.53	0.96	3.68	0.90	3.39	1.01
B-24　英語の本や雑誌や新聞が読める	3.65	1.06	3.92	0.97	3.40	1.09
B-25　英語で（個人的な）手紙や電子メールが書ける	3.77	1.06	3.92	1.01	3.62	1.09
B-26　英語を使う国や地域の文化や背景などの知識を学ぶ	3.83	1.04	4.03	0.92	3.65	1.11
B-27　英語で専門分野の本や雑誌や論文が読める	3.76	1.06	3.94	0.98	3.58	1.12
B-28　英語で専門分野の論文や報告書が書ける	3.41	1.13	3.51	1.10	3.31	1.17
B-29　インターネット上の英語の情報を読み、利用できる	3.80	0.94	3.89	0.89	3.72	0.98
B-30　英語で自分の考えや気持ちを伝えることができる	4.54	0.73	4.69	0.67	4.40	0.77
(7) 大学の英語教育に対して、どのような授業を希望しますか。	学年平均	SD	看護平均	SD	栄養平均	SD
B-31　英語の基本的なことを、ていねいに教える授業	4.03	1.07	3.86	1.14	4.19	0.98
B-32　あまり厳密な和訳をせず、英文をたくさん読む授業	3.29	1.04	3.26	1.09	3.32	1.00
B-33　英語で自分の考えや気持ちを書くことを教える授業	3.56	1.10	3.38	1.08	3.31	1.06
B-34　聞いたり話したりコミュニケーションに必要な英語を教える	4.31	0.94	4.62	0.67	4.01	1.07
B-35　自分の専攻分野に関連する英語を教える授業	4.07	0.87	4.41	0.76	3.75	0.86

（表３の棒グラフ）

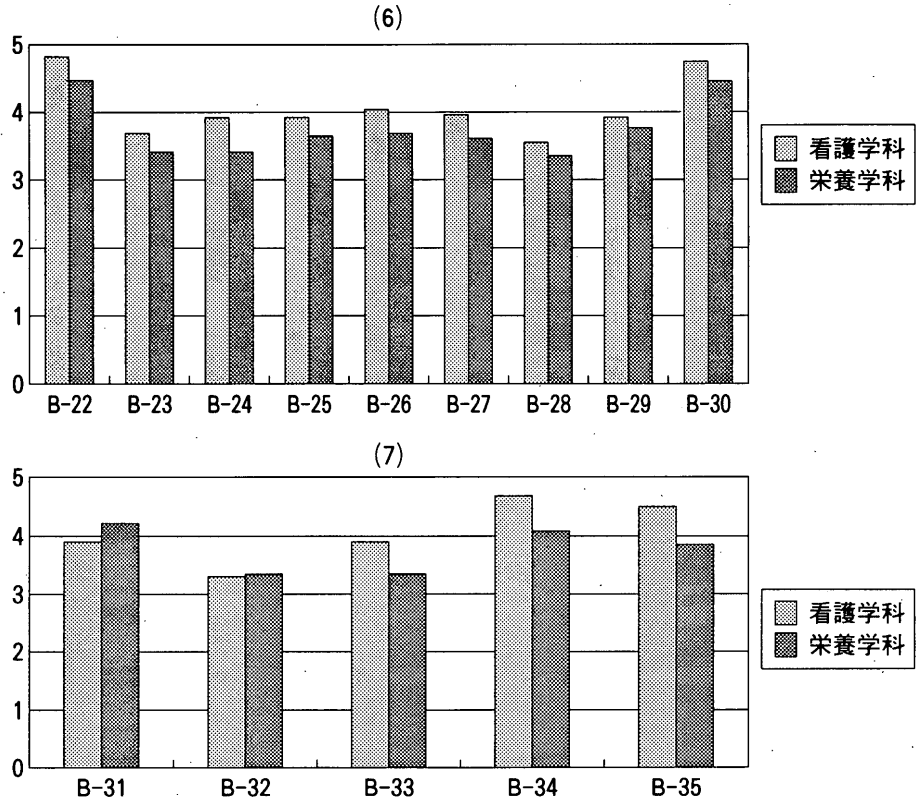


表４　平成12年度入学者の入学方法（数字は入学者数）

	推薦入学	一般入学試験（英語選択者）	一般入学試験（非英語選択者）	合　計
看護学科	40	28	20	88名
栄養学科	45	36	15	96名

る。(6)と(7)は札幌大学の尾田智彦氏の調査項目を参考に作成し，それぞれ５段階評定尺度を用いて回答してもらった。それぞれの評定尺度は以下の通りである。

(6)の評定尺度

大切でない ＝ 1　2　3　4　5 ＝ 大切である

(7)の評定尺度

希望しない ＝ 1　2　3　4　5 ＝ 希望する

調査対象者：188名　　有効回答総数：180

内訳　看護学科　87名（天使女子短期大学履修者３名と退学者１名除く）

栄養学科　93名（回答不備１名と退学者３名を除く）

2. 2. 結果についての考察

表３に示したように、全体として平均値が高い。これは大学入学後新たな気持ちで英語学習に取り組みたいという心情の表れとも考えられるし、入学後学科ガイダンスにおいて国際交流の時代、情報化時代のなかで英語の重要性が強調された影響があるかもしれないし、このアンケートは後に個人指導用データとするため記名式にしたので、多分に建前で回答したとも考えられる。平成12年度の入学者については、一般入学試験における英語は選択であった。内訳は表４のようになる。

一般入学試験において、看護学科は入学者の58.3％が英語を選択したのにたいし、栄養学科は70.6％であった。得点平均も栄養学科が僅かに高かった。しかしアンケート結果では全体として看護学科のほうが英語学習に対して意識が高い。従って栄養学科の推薦入学者または／および一般入学試験入学者のなかで非英語選択者の英語力および学習姿勢において、この差が生じたものと解釈できる。

(6)の「英語を学ぶ必要性」に関しては、B-22

「海外へ行ったとき（食事や買い物など）日常的なことができる」とB-30「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができる」が高い値を示している。これは対面によるコミュニケーション（face-to-face communication）のための英語力が大切であると考えているといえる。1993年に道内にある私立の四年制大学16校、6年制大学2校、短期大学27校に実施した「大学英語教育にたいするニーズ分析」（堀内他　1995：10ページ）の非英語専攻生が回答した結果と同じである。B-28「英語で専門分野の論文や報告書が書ける」がやや低いのは、現時点では「論文を書くということ」が自分の問題として考えられなかったのかもしれない。

(7)の「英語の授業に望むこと」に関しては、全体としてB-34「聞いたり話したりコミュニケーションに必要な英語を教える授業」が高い値が示しているが、他の調査でも「会話できる英語力」が最高値を示した。これは先に触れた1993年の全道の調査や1984年に大学英語教育学会が実施した全国的な調査結果と同じである。後者の調査はほぼ10年かけた全国的な調査であるが、必要な英語力としてコミュニケーション能力の重要性を大学生は60.1%、社会人（大卒）は78.3%を示し、大学教員は47.0%であった（JACET　1993：12ページ）。

(7)に関して学科別にみると、栄養学科のほうがB-31「英語の基本的なことをていねいに教える授業」の数値が最も高い。看護学科はB-35「自分の専攻分野に関連する英語を教える授業」を希望する学生が多い。B-31も低いとはいえないのでニーズがあると考えられる。従って，これら学生の希望および入学者の背景から、専門英語の学習に耐えうる基礎力を育てなければならない。

今後、学生の英語学習についての意識調査に加えて、入学者の選抜方法が3通り（推薦、一般入学試験、大学センター試験）であるから、入学後基礎学力テストまたはplacement testなどを実施し、学生個々の英語力の把握が必要である。これは今後の早急な課題である。

「その他希望することがあれば」（自由記載）については看護学科19名、栄養学科21名が希望やコメントを記載している。前者は「基礎をていねいに教えて欲しい」が最も多く、次に「単語をたくさん学びたい」、「英文和訳ばかりなら飽きてしまう」などのコメントが見られた。後者は「英語は苦手、不得意、嫌い」という表現とならんで、「解る授業にして欲しい」が多かった。

要約すると、全体として英語学習への志向または意識は低くないといえる。これら意欲の芽を摘まないために、受験英語式指導[10]を脱却し、英語の基礎力を高める授業が求められる。英語教員の授業組み立てへの創意工夫、指導技術、学習援助への努力が問われることになるだろう。人が人を育てることは昔も今も変わらないはずであるから、語学教員の資質と姿勢が最も重要である。次に外国語教育の環境改善が求められる。教育工学に基づいた学習システムを導入し、教室外作業のできる環境、個別学習ができる環境の整備が急務である。教室内で教員が基礎を教え、教室内外で学生は自由に英語を使ってみる。教師の指示による課題ではなく、学生自ら選択した学習活動が学生のなかの知識を活性化し、使う必要から基礎に注意が向けられ、これらの繰り返しは相乗効果を生むだろう。今日コンピュータの普及でこれが可能となった。教師と学生の努力をもってしても教室内作業だけでは限界があると思われる。

3. 2学科教員からみたESPへのニーズ

3.1. アンケート調査と集計結果

それぞれの専門分野における英語のニーズは大学1年生の段階では明確でないだろう。そこで、学生の英語学習への志向を専門教育との関係からどのように育てるべきかを知るために、学内の専門系教員に専門英語の必要性について調査を実施した。調査項目作成にあたり、群馬県立医療短期大学の渡辺蓉子氏が実施した「看護婦の英語のニーズ分析」（1998）で使われた項目を看護栄養学部に合うよう改めた。5項目から成る極めておおまかな質問項目であるが、ニーズの傾向をみるためなので一般的な質問項目でよいとした（資料2参照）。回答回収後の集計結果は以下の表5から表8までに示したとおりである。

調査対象者：2学科教員ならびに助手　合計38名
内訳　看護学科　20名
　　栄養学科　18名

表5　回答者数および回収率

看護学科	11名
栄養学科	15名
合　計 (回収率)	26名 (68.4%)

注：看護学科教員は学生の病院実習指導のため学外勤務が多く、また回答の締切が1週間後であったことが影響したと考えられる。

回答者内訳

	教授	助教授	講師	助手	記入なし
看護学科	2	2	2	4	1
栄養学科	5	1	3	6	0

表6　項目1　看護婦(士)・管理栄養士にとっての英語力の必要度

	絶対必要(%)	必要(%)	不要(%)	その他(%)
看護学科 11名	7 (63.6)	4 (36.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
栄養学科 15名	7 (46.7)	8 (53.3)	0 (0.0)	0 (0.0)

表7　項目2　最も重要と思われる英語力の順位

	読解力	作文力	聴解力	会話力
看護学科　9名	1	4	2	3
栄養学科 11名	1	4	3	2

項目2の別表　(順位でなく○を記入した人数)

	読解力	作文力	聴解力	会話力
看護学科　2名	2			2
栄養学科　4名	4		2	3

注：傾向を見るために回答は貴重であるので除外しなかった。

順位選択の内訳

4つの英語力	重要と思う順位	看護学科 n＝9名	栄養学科 n＝11名
読解力	1	9	6
	2	0	0
	3	0	5
	4	0	0
作文力	1	0	0
	2	2	2
	3	0	1
	4	7	8
聴解力	1	0	0
	2	6	10
	3	3	1
	4	0	0
会話力	1	0	5
	2	2	1
	3	5	3
	4	2	2

項目３　英語の４技能が必要な場合（自由記載）

注　表現が異なっていても内容が同じであると考えられるのもは一つの場合にまとめ、(　　) のなかの数字は同じ内容を書いた人数を示す。

看護学科

読解力

① 海外の教科書、専門誌から知識や技術を読み取るため。(5)
② 研究を行うときの文献探し。(3)
③ 英語論文をクリティークする場合。(1)
④ 臨床ではカルテを読むことは最低限必要。加えて外国文献を研究や学習で読めることが望ましくなってきている。日本の看護はまだまだ外国から学ぶことが多い。(3)

作文力

① 専門の学会やワークショップ等で自分の考えを発表するため。(3)
② 電子メール交換する。(4)
③ 論文を国際学会に投稿する。(4)
④ 英語でアブストラクトを書く。(1)
⑤ 学部では必要ないが、大学院・研究者となった時に学位論文を書くとき必要である。(1)

聴解力

① 学会、国際学会等で話されていることを聴き取るため。(5)
② 外国からの患者に接する場合。(1)
③ 外国の病院を視察するとき。(1)
④ (会話力と併せて) 英語での講演・講義を聴くときや講師とのディスカッションに必要。(1)
⑤ (会話力と併せて) 若い人にとっては、これから必要と思われる。(1)

会話力

① 学会での質疑を行う場合や海外研修を行うとき。(4)
② 外国人の患者と病状やケアのことでコミュニケートする場合。(4)
③ 外国のNs(看護婦･士)または研究者とのディスカッション。データ収集。(1)
④ 国際学会参加、または国際社会に生きるために、文化交流。(1)

栄養学科

読解力

① 海外の文献を読む。(6)
② インターネット検索、手紙、簡単な文献などを読む力。(1)
③ 外国の論文・雑誌・料理レシピを読む場合。(1)
④ (作文力と併せて) 自己学習、文献を活用する習慣・能力を身につける。(1)

作文力

① 機会があれば海外の雑誌に投稿、または学会発表。(4)
② 論文サマリー (アブストラクト)、手紙など書く。(2)

聴解力

① 学会出席。(2)
② (栄養) 指導対象者の訴えを理解する。(1)
③ 専門職者として、外国人と情報交換したりするので。(1)
④ 人々の関わりの中で、生きた言葉として英語が使えることが必要と思うから。(1)

会話力

① 海外協力隊、在日外国人への栄養指導、国際会議、学会出席。(9)
② 海外研修および研修受け入れ、仕事を一緒にするとき。(3)
③ プレゼンテーションするとき。(1)
④ 先進国の栄養士との交流を図り、グローバルな視点で日本の栄養状況を改善する実力をもつ。(1)

表8　項目4　看護婦(士)・管理栄養士として英語の文献・専門誌を読む必要性

	多いにある(%)	時々ある(%)	それほどない(%)	その他(%)
看護学科 11名	10(90.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(9.1)
栄養学科 15名	8(53.3)	6(40.0)	1(6.7)	0(0.0)

注：「その他」を選択した理由：進学あるいは研究活動には必要である。

項目5　看護・栄養の専門家に読まれている和文・英文の専門誌

（　　）のなかの数字は同じ専門誌を選択した2名以上の場合を示す。

看護学科

看護実践の科学、日本看護学教育学会誌、ターミナルケア、Quality Nursing（和文）
看護（かんご）、看護学雑誌、看護技術（以上一般的）、American Journal of Nursing（AJN）(4)、Nursing Mirror、Nursing Outlook（以上学部・臨床）、看護研究（3）、日本看護科学会誌(2)、Nursing Research (6)、Western Journal of Nursing Research（以上専門・研究者）、Clinical Nursing、Journal of Nursing Education、Nursing Times、Oncology Nursing Forum、Research in Nursing and Health, Journal of Nursing Education（JNE）、The American Journal of Maternal/Child Nursing (MCN)

栄養学科

臨床栄養 (7)、栄養日本 (5)、栄養学雑誌 (3)、学校給食 (2)、食の科学 (2)、栄養食糧学会誌、
栄養学レビュー、栄養と料理、学校の食事、からだの科学、食生活、食品工業、診断と治療、調理科学、日本家政学会誌、日本食品工業学会誌、プラクティス、ビタミン（Vitamins)、AERA MOOK（朝日新聞社)、The Journal of Nutrition (5)、The American Journal of Clinical Nutrition (5)、Journal of the American Dietetic Association (2)、Journal of Nutrition Education (2)、American Journal of Public Health、Health Education Journal、Nutrition Reviews（和訳あり)、School Food Service、Journal of Food Protection

回答者からの付記

①現場の栄養士は読んでいないかもしれないが、研究の引用に使われることが多い（3）
②教員の立場から、（時間的にまたはニーズ上）読めるなら読んで欲しいと思う専門誌名を挙げた。(2)

上記の質問項目以外に英語教育に反映すべき事柄や助言など（自由記載）

看護学科

①専門用語の概念を理解することが英語の力と並行して重要だと思う。
②英語を生活現象と結びつけて、わかりやすく教えて頂きたいと思う。
③英文構造の把握のしかたを教えてほしい。
④単語は動詞が基本であると思うので、名詞化、形容詞化、副詞化など関連づけて教えて頂きたい。
⑤語源に遡って理解できると学生のなかでつながっていくと思う。
⑥英語は日本語と全く異なる思考特性があることを学生に理解させてほしい。
⑦特に文化背景や、文章が書かれた背景なども併せて教えると、学生の興味は倍増すると思う。
⑧さまざまな力をもつ学生の英語力を高めてほしい。
⑨シラバスへの提案
　英語Ⅰ―英文読解
　英語Ⅱ―英文読解。後期あたりに専門を含む文献を用いる（身体名称、病名、症状、看護などを含む文献）
　英語文献講読―専門誌のなかの論文

栄養学科

①項目5で挙げたような英語の専門誌を読む時間もあるとよい。専門用語は難しいと思うが、他の（専門）教科と英語を関連づけられたら楽しいと思う。
②管理栄養士の働く場（施設）は、今後広がっていくと考えられるが、今の状況で日本で働く場合は特に英語を使う必要性はないと思う。日本において外国人労働者も多くなり、ますます外国人との関わりが多くなっていくので、これからの学生が英語力をつけていくことはとても大切だと思う。外国語を知ることは自信をもったり、世界が広がっていくことだと感じる。栄養士がまだまだ発展途上にある（つまりこれから社会変化の中で大いに伸びる可能性をもつ）職種であるために、英語力をつけて、国内でも海外でも仕事の幅を広げられたら良いと思う。

3.2. 結果についての考察

英語の必要度に対して両学科とも必要と回答しているが、看護学科のほうが「絶対必要」と答えた率が高い。英語4技能の重要度に順位をつけるとき、看護学科では全員が「読解力」を1位に挙げているのに対し、栄養学科は6名が「読解力」を、5名が「会話力」を挙げている。○をつけた回答が順位による回答であれば、結果は多少異なったかもしれない。「聴解力」と「会話力」に順位をつけるとき、2通り答えた場合が2回答あった。当然聴解力も会話力の技能の一つと考えられるので、2通りの回答となったものと解釈し、筆者の一存でそのうちの一つを回答として数えた。少ないデータであるから傾向がわかるだけでも回答は貴重であるので、削除はしなかった。

項目5において看護・栄養の専門家に読まれている和文および英文の専門誌名を書いてもらったのは、英語教員もそれらに目を通すことによって専門分野の動向や専門分野に固有のテキストに触れ、教材準備の参考にするためである。項目5に関しては、回答者の専門領域か看護一般を問われているのか質問の意図が不明瞭との指摘があったが、ここでは学部学生の英語教材を準備するときの参考にするため、看護学一般または栄養学一般という意図であった。

全体として、学科教員ならびに助手の方々の回答からESPへの必要性と英語教育にたいする期待が強く感じられた。この結果を今後の英語教育構築に生かしたい。

4. 学習者の自立にむけて

ESP教育をする目的は、将来の職業に生かす専門英語の基礎づくりをすることである。そして、卒業後も継続して研鑽し続ける姿勢の育成でなければならない。深山他も「学習者の自立」の重要性を以下のように述べている。

専門分野の英語は、社会の多様化とその変化の加速に伴って、その姿がどんどん変化していっている。特に科学技術や医療の分野では、専門の細分化と統合化が絶えず繰り返され、(中略)。したがって、学習者自らが必要な情報を選択し、分析でき、変化に対応できるような能力を身につける必要がある。そのため、教室内活動はもとより、課外活動も「学習者の自立」を目指していなければならない。(深山他　2000: 86ページ)

それでは「自立した学習者」を育てるためには、具体的にどのような授業または指導が望ましいのであろうか。再び深山他から引用する（深山他2000 : 86ページ)。

(1) 学習者の専門知識を生かすことができる
(2) 教室内活動として学生同士の共同作業ができる
(3) 教師は provider型ではなく、coordinator 型が望ましい

ESPの授業では、グループワークが有効であり、学生同士は専門知識を生かした共同作業を通して学ぶ。教師から学習者へという一方的な関係ではなく、双方向の関係が望ましい。すなわちESPクラスを担当する教師は、課題の設定、課題にむけての準備（リサーチ)、課題の発表（プレゼンテーション）のしかたなど共同作業に必要な基本的プランおよびアクティビティについて指導した後は、グループワークが機能しているかどうか注意を払う。必要に応じて語学面の援助を与えるとしても、学生の専門知識を生かした学習形態が学生の自立を促す。教師が従来の provider型ではなく、coordinator 型であるべきだというのはこのような意味においてである。ただし、日本では教師も学習者も自立を目指す学習スタイルに慣れていないことがあるので、まずESPの教授スタイルに学生を慣れさせることも必要であるとの指摘は一考に値する（同: 88ページ)。共同作業が機能するためには、何をどのようにするのか理解することが先決であるからである。

5. 今後の英語教育への提言

大学の教育目標および専門系教員の意見から、天使大学における英語教育はESP 教育の方向で進めることが適当であるとの結論を得たと解釈する。四年制大学設置完成年度以降のことも視野にいれて、幾つか提案したい。

1) 3通りの入学者に対して英語基礎学力テストの実施
2) 1年次はEGP教育、2年次は準ESP教育、それ以降はESP教育に移行
3) 科目設置において基礎的な「ライティング」

の授業の導入

4) 語学学習環境の充実

5) 語学専任教員の増員

まず1)の基礎学力テストの結果にもとづき、2)のEGPの基礎学力を充実させるために、1年次で習熟度別クラスが望ましい。ESPクラスでは学生の専門知識を尊重し、共同作業を中心として授業をすすめるので、習熟度が様々でも対応可能である。2年次以降については、適切な教材内容および学習援助として専門基礎語彙リストの作成などが求められる。3年次以降の教材準備に関しては、専門系教員との話し合いが不可欠である。

つぎに将来的には「ライティング」の授業が必要になるだろう。インターネットの時代、読み書きの能力は必須であるといわれている。しかしそれ以前に、語学習得の観点からライティングは重要な意味をもつ。ライティング（production）を通して、頭のなかの知識としての英語－文法や語彙や様々な表現—を動かすことができる。言葉は使ってみてはじめて内在化するものであるし、ニーズ（書く必要）から英語そのものへの観察も生まれてくる。英語のレトリックを学ぶことは、日本人の学生にとって思考の整理の訓練にもなるし、英語でコミュニケーションする上で必須である。(Bander　1971: 2-3ページ)

4)番目として、クラスの人数と、教育機器の使用について述べる。実験・実習が多い専門分野であるから、1学科を2クラスに分けざる得ないという事情もあろうが、大人数の場合（1クラス45～50名)、教師の指導の意図が学生個々に行き渡らない、もしくは学生個々のフィードバックに十分対応できていないかもしれない。特に筆者が担当したオーラル・イングリッシュの授業においては、教師の工夫や努力をもってしても、学生・教師ともにフラストーレーションが高まりやすかった。LLとコンピュータ両方を備えたCALL (Computer-Assisted Language Learning) 教室があると、授業での活用ならびに学生に個別学習の場を提供できる。CALLは、リーディング、ライティング、文法、語彙学習、音声学習など活用範囲が広い。またコンピュータによって個別学習の習熟度が示されたり、学習時間の記録が登録されるので、学生個人が学習の自己評価ができるし、教員も学生の個人指導に活かすことが可能である。

最後に、上記の3)と4)を取り入れるとき、より有効な英語教育を進めるために、語学の専任教員の増員が必要になるだろう。教育機器の使用は、学生にとって学習の場が広がることであるが、教員にとっては授業時間以外に準備や点検をするため、時間のかかる作業となるからである。しかし時代がそれを求めている。

おわりに

以上述べてきたように、EGPとESPは学習者にとってそれぞれ重要な役割をもっている。大学教育のなかで、これらをいかに機能させるかは今後のカリキュラムとシラバスの配置にかかっている。学生へのアンケート調査からは、英語学習に対して英語力を身につけたいという意識は高い。学生の専門分野の大先輩でもある学科教員から得た専門英語のニーズは、今後ESP教育構築の貴重な指針になるだろう。学生が授業または履修に関係なく、自ら英語力を伸ばす努力を続けるよう方向づけたいものである。四年制大学設置完成年度までに、何ができるのか、何をしなければならないのか、を考えていきたい。ESP教育を進めるにあたり、専門系教員と語学教員の共同作業，つまり情報や意見の交換によって、天使大学の英語教育が実りあるものになることを願う。

謝辞

看護学科ならびに栄養学科の教員、助手の方々から頂きましたアンケート調査へのご協力に対し、衷心より御礼申し上げます。

注　釈

1) 天使大学講義概要2000年　1-2ページ。

2) Basic English。C. K. Ogdenによって1930年に公表されたもので，850の基本語と最小の文法規則からなる言語組織表のこと。英語の中に存在する核的な英語がその中に含まれている（『英語教育用語辞典』1999：35ページ)。Basic Englishは優れた理論であるが，学習が徹底しなかったり，学習者のモティベーションが低いときは，中途半端に終わりやすい。筆者がESPと対比するのはこのBasic Englishである。

3）学校英語。主として文法教育と訳読指導を中心とする外国語教授法で教えられる英語。特定の人物が提唱したものでも，科学的根拠に基づくものでもないが，中世以来現在に至るまで，外国語学習において広く用いられている教授法による（『英語教育用語辞典』1999：129ページ）。

4）Discourse community ディスコース・コミュニティー。学問的背景や職業などの固有のニーズを持つことにより同質性が認められ，その専門領域において学問・職業上の目的を達成するために形成される集団（『ESP の理論と実践　これで日本の英語教育が変わる』2000：197ページ）。

5）尾田智彦氏の試算による（「札幌大学経営学部語学教育に関する基本方針」のなかで）。中学週４時間，高校週６時間と仮定して，年間30週として計算すると，中学4(時間)×30(回)×3(年) = 360(時間)，高校6(時間)×30(回)×3(年) = 540(時間)。合計は900時間となる。その英語の授業中どれだけ英語を使うかを４割と考えると，900×0.4=360(時間)。１日実質12時間と考えても30日。６年間もというのは実際には僅か１ヶ月のことである。また日本の学生が高校卒業までに読むテキストの総量は，ペーパーバックに換算すると僅か80ページ分に過ぎないという説もある。(中略)「６年間も…」という幻想を捨てるべきであろう，と述べている。

6）1995年から1998年までの大学英語教育学会（JACET）全国大会。1997年11月の The Japan Conference on English for Specific Purposes（会津大学）での発表および Proceedings。1999年の第12回世界応用言語学会（AILA '99）における各大学の ESP 研究発表および実践報告。多数の学会発表や発表資料にもとづく。

7）第47回東北・北海道地区大学一般教育研究会全体会Ｉ講演「大学の未来象と教養教育」において、立教大学寺崎昌男氏が「大綱化」の経緯について語ったなかで指摘したことである。(1997年福島大学)

8）第39回（2000年度）大学英語教育学会全国大会における発表：わたしの授業『国境のない教室』を目指して―インターネットで磨くライティング能力―(北海道大学 西堀ゆり氏)。コンピュータの機能を駆使し，インターネットを使って外国の学生と交流させる授業。学期の始めに，学生に英語のパラグラフの概念とその構成法を理解させ，論旨を１パラグラフに書く訓練を行ったあとで，インターネットを利用した言語活動を行う。５つの言語活動のなかには，書くことを通して即時的にチャット（Chat 'n' Debate）を楽しむ活動も含まれる。

9）39回（2000年度）大学英語教育学会全国大会。JACET-ESP 研究会（本部・九州・沖縄支部合同シンポジウム）における報告「ESP アンケート項目解説・結果総論」(駿河台大学 柴山森二郎氏）による。

10）大学受験の準備のため文法教育と訳読指導を中心とする英語教授法。受験対策のため，出題形式の模擬問題を解くような学習も含まれる。

参考文献

相沢佳子．1995.『ベーシック・イングリッシュ再考』リーベル出版.

Bander, R. G. 1971. American English Rhetoric: Writing from Spoken Models for Bilingual Students. Holt, Rinehart and Winston, Inc.

大学英語教育学会（JACET）内教育実態調査研究会．1993.『21世紀に向けての英語教育』大修館書店.

Dudley-Evans, T. and St. John, M. J. 1998. Developments in English for Speccfic Purposes. Cambridge University Press.

堀内満智子・米坂スザンヌ・シンシア・エドワーズ・ジェラルドP.ハルボーセン・佐藤デール・アン・小林サーリー・吉田　翠・早坂慶子．1995.「北海道における大学英語教育のニーズ分析　An EFL Needs Analysis of Students at Private Universities and Colleges in Hokkaido」静修学園北海道環境文化研究センター Technical Report No. 0015.

ジョンソンK.・ジョンソンH.（編）岡　秀夫（監訳）．1999.『外国語教育学大辞典』大修館書店.

深山晶子（編）．2000.『ESP 理論と実践　これで日本の英語教育が変わる』三修社.

尾田智彦．1999.「留学生に対する英語教育の改善に向けて」『札幌大学「経済と経営」第29巻第４号』．札幌大学.

Ogden, C. K. 1968. Basic English International Second Language. A revised and expanded version of The System of Basic English by C. K. Ogden. Authorized by the Orthological Institute and prepared by E. C. Graham. With a Foreword by L. W. Lockhart. Harcourt, Brace & World, Inc., New York.

Orr, T. 1998. 'ESP for Japanese universities: A guide for intelligent reform.' The Language Teacher. JALT. Vol. 22/11. 19-21, 31.

白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則. 1999. 『英語教育用語辞典』大修館書店.

渡辺蓉子. 1998.「臨床看護婦の英語必要分析」『The Language Teacher』JALT. Vol. 22/7. 29-31, 38.

Yalden, J. 1987. Principles of Course Design for Language Teaching. Cambridge University Press.

資料1

平成12年（2000年）4月17日～20日

英語Ⅰ　英語学習に関するアンケート

学科＿＿＿＿　学生番号＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

このアンケートは、新しく誕生した天使大学の英語教育について考えるための基礎資料にするものです。皆さんのこれまでの英語学習についての経験や考えを、教えてください。

なお、このアンケートは基礎資料のための調査ですので、皆さんのプライバシー（氏名、回答内容など）は、公表しません。また、成績には一切関係しません。

(1)～(4)については、該当する項目を○で囲んでください。複数回答してもよろしいです。

(1)　高等学校でのリーディング教材について

B-1　テキスト中心であった
B-2　副読本やプリントでも読んだ
B-3　Graded Readers（語彙数による難易度別の読み物）を読んだ
B-4　英字新聞や雑誌から、ニュースで話題になったものを読んだ
その他（　　）

(2)　高等学校での英語の「読み方」について

B-5　文法の説明や単語・熟語の説明をしながら、英文和訳をした
B-6　英文の内容につい大意把握をした。
B-7　直読直解をした（和訳をしないで、英語で理解を確認する）
B-8　練習問題をすることが多かった

(3)　英文和訳のしかたについて

B-9　すべて厳密に和訳した（例えば、関係代名詞のある文を後から訳す、など）
B-10　複雑な構文のところだけ和訳した
B-11　フレーズ・リーディングをした
　　（例えば、意味のまとまりのあるグループで区切って、文頭から訳す、など）
B-12　だいたい内容理解ができれば、訳しかたにはこだわらなかった

(4)　大意の把握のしかたについて

B-13　自分のしやすい方法で把握した
B-14　英語のパラグラフの構成を習って、それにもとづいて把握した
B-15　与えられた選択肢（3個または4個）から、内容に合うものを選んで把握した

(5)～(7)については、1～5の段階評定で、（　　）の中に当てはまる数字を書いてください。

(5)　英語の文法に関して、次のそれぞれについて、どのくらい当てはまりますか。

B-16　基本5文型の区別がつく　　当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）
B-17　英文の主節と従〈属〉節が区別できる
　　当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）
B-18　句と節の区別ができる　　当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）
B-19　関係詞節（関係代名詞、関係副詞など）を理解している
　　当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）
B-20　分詞（-ing形、-ed形）の修飾用法を理解している
　　当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）

B-21　不定詞と動名詞を理解している

当てはまらない＝　1　2　3　4　5　＝当てはまる（　　）

(6)　英語を学ぶことに関して、次のそれぞれについて、どのくらい大切であると考えますか。

B-22 海外に行ったとき、（食事や買い物など）日常的なことができること

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-23 英語の映画やテレビ番組や歌などが理解できる

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-24 英語の本や雑誌や新聞が読める

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-25 英語で（個人的な）手紙や電子メールが書ける

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-26 英語を使う国や地域の文化や背景などの知識を学ぶ

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-27 英語で専門分野の本や雑誌や論文が読める

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-28 英語で専門分野の論文や報告書が書ける

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-29 インターネット上の英語の情報を読み、利用できる

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

B-30 英語で自分の考えや気持ちを伝える

大切でない＝　1　2　3　4　5　＝大切である（　　）

(7)　大学の英語教育に対して、どのような授業を希望しますか。

B-31 英語の基本的なことを、ていねいに教える授業

希望しない＝　1　2　3　4　5　＝希望する（　　）

B-32 あまり厳密な和訳をせず、英文をたくさん読む授業

希望しない＝　1　2　3　4　5　＝希望する（　　）

B-33 英語で自分の考えや気持ちを書くことを教える授業

希望しない＝　1　2　3　4　5　＝希望する（　　）

B-34 聞いたり話したりコミュニケーションに必要な英語を教える授業

希望しない＝　1　2　3　4　5　＝希望する（　　）

B-35 自分の専攻分野に関連する英語を教える授業

希望しない＝　1　2　3　4　5　＝希望する（　　）

その他英語学習する上で、希望することがあれば、書いてください。

ご協力ありがとうございました

資料2

0. 回答者について、該当するところに○をつけてください。

学科名：（　　）看護学科　　（　　）栄養学科

回答者：（　　）教授　（　　）助教授　（　　）講師　（　　）助手

1. 調査項目

項目1　看護婦（士）、管理栄養士にとって英語力は必要であると思いますか。該当するものに○をつけてください。「その他」を選んだ方は、理由を書いてください。

（　）絶対必要　（　）必要　（　）不要　（　）その他

項目2　項目1で、絶対必要または必要と答えた方にお聞きします。次の4領域について、必要な英語力として重要と思われる順に、1、2、3、4、を記入してください。

（　）読解力　（　）作文力　（　）聴解力　（　）会話力

項目3　項目2の回答に関して、どういった現場（または場合）において、その英語力が必要だと思いますか。具体的に書いてください。

読解力

作文力

聴解力

会話力

項目4　将来、看護婦（士）、管理栄養士として、英語の文献・専門雑誌を読む必要性について、該当するものに○をつけてください。「その他」を選んだ方は、理由を書いてください。

（　）多いにある　（　）時々ある　（　）それほどない
（　）その他

項目5　看護・栄養の専門家に比較的よく読まれている和文または英文専門雑誌名を挙げてください。英文雑誌の場合は原文タイトルでお書きください（複数回答可）。

2. 自由記載欄　上記以外で英語教育に反映すべき事柄がありましたら、お書きください。
（必要であれば裏面も使ってください）

ご協力有り難うございました